

発見!

たからも / ただみの文化遺産

第7回

仕事着のモモヒキ 国指定民具と江戸時代の寸法図



室町時代のモモヒキ

今見かけるモモヒキ(股引)は、お祭りで神輿をかつぐ若い衆が履いているものです。足に木綿の布地がピチピチにくっついていて下衣で、もとは仕事着でした。モモヒキは、布地が密着しているので足さばきがよく、水田作業にはその機能を発揮します。すねに付ける脚絆をハバキといい、すねから股まであるハバキがモモハバキとなり、発音が変化してモモヒキになったといわれます。写真1は室町時代の馬曳さがモモヒキをはいている図(『慕帰絵詞』巻7、15世紀)です。股に密着したモモヒキをはいて、すねにハバキを着けています。



▲写真1 室町時代のモモヒキ(『慕帰絵詞』西本願寺蔵、出典『続日本の絵巻9』中央公論社)

民具のモモヒキ

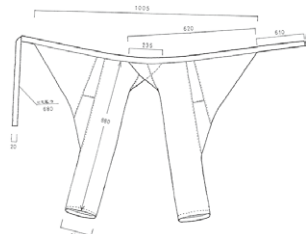
写真2・3は、国指定民具のモモヒキで、2002年(平成14)に只見町大倉の飯塚勇さんから寄贈された男物です。妻の飯塚カツミさんが、昭和10年代(1935~1944)に木綿と真田紐で作った仕事着です。ヒドロツ田(ヒジドロ田、湿田)で田植えや草取りに入るときに使いました。



▲写真2 モモヒキ(9-211)

股割れになった両股分離式の下衣で、ズボンとはずいぶん違います。

モモヒキは、胴を締める腰紐に、二本の筒形の布を縫いつけて作ります。

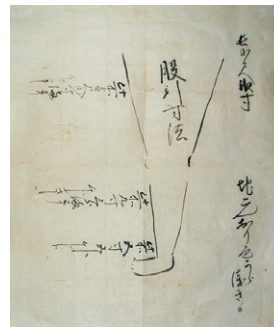


▲写真3 モモヒキ(9-211)実測図

履き方は、①モモヒキの前側が正面になるように持って両足を通し、股の部分を股間に引っ掛ります。②右側の前布で尻をつつみ、右の腰紐を後ろにまわして、左側に持っていき左手で持ちます。③右手は、股間にある股割れの穴に入れて、モモヒキの上から左手で持つ腰紐をつかみ、股間の穴から抜きます。④左手は、左側の前布で尻をつつみ、左の腰紐を右側に持っていき、右脇で左右の腰紐を結びます。

江戸時代のモモヒキ注文図

写真4の「股引寸法図」(「医家原田家書籍文書」只見町教育委員会蔵)は、只見町黒谷の医家原田家に伝来した文書です。原田家は江戸時代の村医で、5代目の原田玄節(1751~1824)の筆跡と推定されます。年代は書かれていませんが、没年の文政七年(1824)が下限です。全体の長さ足まわりについて、裾口のくじらさし*寸法をcmに換算してみます。



▲写真4 「股引寸法図」(医家原田家典籍文書)

「股引寸法」長式尺式寸(83.4cm) 地こんなり 色うら浅き二而(太股)「此所一尺式寸(45.5cm)まわり くじらさし」(膝下)「此所九寸三歩(35.3cm)まわり くじらさし」(踝)「此所五寸五歩(20.9cm)まわり くじらさし」

これは、くるぶしは細く、そこから上に行くにしたがって太く作ってほしいというモモヒキの注文図です。表地は紺色で裏地は浅黄色の裕の、モモヒキです。裾口を比べると、原田玄節のは約21cmで、17cmの民具(写真1)よりはゆったりとしています。たけは、玄節のは83cm、民具は88cmで、玄節は現代人より小柄だったようです。

約80年前の民具のモモヒキが、江戸時代の寸法図につながり、室町時代にまでさかのぼっていきます。

*くじらさしは裁縫用の物差し。尺貫法(1尺:30.3cm)の1尺2寸5歩(37.9cm)がくじらさしの1尺。

文:久野俊彦
民具写真:原永円香



ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示情報

奥会津文化施設間連携企画展「奥会津の縄文」

会期:2023年7月22日(土)~11月12日(日)

場所:ただみ・モノとくらしのミュージアム ふれあいホール

入館無料